



神様迎え、実りに感謝 能登の被災地で「あえのこと」

能登半島地震で被災した石川県輪島市三井地区で5日、農耕の神様を迎え入れ、感謝をささげる伝統行事「あえのこと」が行われた。主人役の小山栄三井公民館長(74)が田から神様を屋内に案内。「今年収穫されたものばかりです。ゆつくりと召し上がっていただければ」と呼びかけ、

(2024年12月5日 読売新聞オンライン)

赤飯や野菜などでもてなした。2月には田へ送り出し豊作を祈願する。地震で使っていた建物の基礎や扉が壊れ、別の建物で行った。「あえ」はもてなし(※文責注・アエII饗)、「こと」は祭りを意味するとされ、2009年にユネスコの無形文化遺産に登録された。

.....

【概要】
毎年12月4日・5日頃、農村の家々では一年間の収穫の感謝と次年度の五穀豊穡を祈願するため田の神を祭る。まず、家の床の間に男女の田の神を表すため種もみの俵を二つ据え付け、それぞれ二股大根と箸を前に置いて祭壇を作る。そのあと、家の主人は紋付袴の正装で家の苗代田に向かい、夜の場合は提灯を持って田の神を家に案内する。田の神は姿が見えないので、あたかも目の前に神がいるように演じるのである。家族全員が迎える中、主人は田の神を家に誘い、炉端で休息させたあと風呂に入れて祭壇に招き、小豆飯、ハチメ(魚)、大根、里芋などを二膳と甘酒の入った

田の神を家に案内する (読売新聞輪島支局・武山克彦、金沢支局・桐山弘太撮影) ▶
従来実施していた建物が被災して使えないため、ボランティア活動の拠点が置かれている古民家レストラン「茅葺庵(かやぶきあん)」を借りて行った(北陸中日新聞 web)

能登半島地震(2024年)により、アエノコトを行ってきた農家の家屋や田圃が被災し、2024年(令和6年)の作付けが出来ない可能性が高まり、収穫を寿ぐアエノコトの実施も危ぶまれたり、農家が避難し被災地を離れ戻らず耕作放棄地となり、結果としてアエノコトを継承する農家が減る可能性が危惧される。また、現地に残留する農家の中には、対外性を意識せずひっそりと個人で行う形式に戻すことを考えたり、農業法人へ委任や地域コミュニティでの祭事として残すことなども検討されている。(2024年4月3日 読売新聞)



▲主人役の公民館長が田の神を迎えに行き、飯を3回打ち込み、ねぎらいの言葉を述べる

た徳利二本を捧げる。このとき主人は、膳の内容を一つ一つ丁寧に説明し、おおよそ一時間後神が食したと見て、お下がりとして家族で膳の物を食べる。神はそのまま年を越すとされ、翌年の2月9日、主人が元の田へ送り出して飯を田に入れる。神が一般の社会に降臨する形式の祭礼で、秋田県のなまはげ・沖縄県石垣島のマユンガナシと同一形式であるが、ここでは神が目に見えぬ形で表されていること、主人が神がいるように一人芝居を演じることが特徴である。(wikipedia)

we support!

RQ
災害教育センター

MONTHLY

復興支援「すけさきた」

「東北に黒糖をほろう! 大作戦しんぶん」改め

「すけさきた」とは宮城県登米市あたりの言葉で「ボランティアに来たよ」という意味である。

DECEMBER 11 2024

資料：読売新聞オンライン、北陸北陸中日新聞web、石川県観光公式サイト「ほっと石川家なっと」、wikipedia